

「長期に渡る透析患者との付き合い方ー透析室外行事について」

医療法人財団はまゆう会新王子病院

○妻鳥舞、末次顕幸、河野由希、中川悦子、渡邊千代子、満行温視、大谷麻岐
安藤寿昭、杉昌宏、江口健太郎、箴島明彦、市丸喜一郎

透析患者は透析室ではわからない人生や生活の背景を抱えている。私たち医療者は彼らの辛い透析生活を想像し、いかに寄り添えるかが問われている。私たちは多くの透析患者と出会いかつ支え合って44年になるが、その付き合い方ことに透析室外での取組みを振り返ってみたい。

透析室外行事は、ドームを貸し切ったの合同大運動会、それぞれの運動能力に応じた登山会、地域ぐるみの夏祭りや展示発表会、体力維持・管理と楽しさを目的とした「歩こう会」やバスハイク、臓器移植の街頭キャンペーン、診療への反省を込めて始めた合同慰霊祭、10年毎の合同記念行事、開設以来88巻に及ぶ雑文集の刊行、じっくりと患者の思いに耳を傾ける「語りの会」など、いずれもお互いの信頼関係を希求してはじまり、育くまれたものである。

しかしながら、患者の合併症と高齢化が進むにつれ、20年前には86%であった腎友会組織率は51%に下がり、透析室外活動にも変化がみられる。ことに今年はコロナ禍の影響でほとんどの透析室外行事は中止になり、様々な場面において人間関係は希薄になりつつある。信頼関係構築の基本となる3密の回避や不要不急の行動変容を強いられるなかで、これ迄育んできた活動を継続していくには、変化を恐れない新たな工夫と勇気ある行動が求められている。そのためには、これまで培ってきたよく語りよく聴くはまゆう文化を大切にしていきたい。